

泥んこ遊び

火あそび

そのⅢ



缶ビール

缶ビールといっても中身の話ではない。そう、空き缶の話だ。あの空き缶に花を挿したことのある人はいるだろうか。コップや、牛乳ビン、ワンカップの空き瓶にだって花を挿したことがあるが、ビールの、と言うよりどうも空き缶には花を挿す気が起こらない。

素材が鉄のせいでもないだろう。鉄や銅、真鍮の花器もある。南部鉄瓶などには花がよく似合う。あまりに軽すぎるからでもない。そう嬉しくはないが私はペットボトルにさえ挿したことがある。

問題はやはりあのペイントだ。あれが花を挿す気分を萎えさせている。缶コーヒーや、他の清涼飲料の缶も同じなのだ。これでもかこれでもかと言うほど情報と自己主張を詰め込んでいる。花を挿す余地などどこにもない。

缶飲料の出る前と後では、どうも文化の断絶があるようだ。日本酒にしろビールにしろラッパ飲みすることはまず無かった。サイダーや、コーラをビンから飲んでもそれは子供のやること、いい大人はちゃんとコップに入れてから飲むものだ。



缶何とかを器に入れ替えずに直に飲む、いや飲ませられている。あの缶のデザインが飲め飲め、すぐ飲めと脅迫してくる。カッコよく飲んでいるテレビコマーシャルがあるが、間も粹もない、ひねた子供の絵にしかっていない。これは形を変えた幼児性の表れなのかもしれない。

いつの時代でもそうかもしれないが、私達は一面、便利さを追求して文化を作ってきた。泣いている子をあやし、痒いところを搔いてやる、更にいえば、ちょっとつねって泣かし、ちょっとくすぐって痒くしておいてから、ちょっと便利なあやし商品を氾濫させている。

すべて痒い所を搔いてもらえる便利な現代生活、焼きあがった作品も最終的に底や表面のトゲトゲをサンドペーパーでこすって滑らかにして出品している。昔は買ったばかりの陶器はテーブルを傷つけないようにと、底をこすり合わせてから使っていたものだ。仕立て下ろしの仕付け糸を解くようなくいきとした気持ちがカラカラという音を聞き分けながらそこにはあった。ひょっとしたら焼き物まで幼児化させて、焼き物フアンの楽しみの一つを私は奪っているのかもしれない。

2006年10月

ドカ弁という弁当箱は今もあるのだろうか。懐かしの昭和世代はドカ弁に限らず弁当箱はすべてアルミだった。

その弁当箱に白いご飯をギュウギュウに詰め、真中に大きい梅干をグイと埋め込むと日の丸弁当になる。雪国の学校では、教室のだるまストーブに特大サイズの薬缶を乗せておき、お昼に弁当箱の蓋に白湯を入れて飲むのである。すると蓋からたらたらとお湯が漏れてしまう奴がたまに出てくる。昔のアルミは弱かったのか梅干の酸で蓋が直ぐに腐食してしまうのだ。

アルミの鍋にも穴があき、たまに町に回ってくる鋳掛け屋に直してもらう。鋳掛といっても美術品の鋳掛のように溶接するわけではなく、ただの半田を穴に詰めて叩き伸ばすだけのいい加減なものだ。だから又すぐに染み出すようになってしまいが余り気にもしない。鍋釜もそのうち売りに来るし、縁日に出ていることも結構ある。



湯飲みや飯碗などは割ればさっぱりと諦めてしまいが、お抹茶用の物は高価でもあり、なかなか諦めがつかない。そんな時に登場するのが漆を接着剤にした「継ぎ直し」だ。接着個所の表面にわざと漆の線を残して、そこに金箔や銀箔を貼って仕上げる。もちろん漆のまま、漆の美しさを残してもいい。

今はホームセンターでいろんな道具や材料が簡単に手に入る。割れてしまったが捨てられない愛着のある陶器の直しを自分でやってみるのもいいものだ。ただの直しの線なのに、いい線、悪い線が出るの

を発見したらしめたもの、手仕事の深みへと真逆さまだ。

ヨーロッパでは「共直し」といって、割れた個所が分からないように修理するが、日本人はその直した跡も景色として楽しんでしまう。なんてありがたい国民性、アーティストティックな手仕事の練磨がそこら中に転がっている。

2008年3月

吹き寄せ

秋も深まり、山々が紅葉する時期になると、風に舞いながら散った落ち葉が庭の片隅に吹き寄せられていたりするものだ。肌寒さを感じながら、朝起き抜けに庭に出てみると、風の神様が芸術作品を残してくれていたりする。ただ隅にかためただけでなく、筋状に掃き跡を残している。見事というしかない。しばし見とれてしまう。

これを見て感動しているのは私だけではない。古来日本人はこの刹那のはかない芸術を文様として残してきた。



「吹き寄せ文」はモミジ、イチョウ、ウルシ、カキ、サクラなど紅葉する木の葉だけではなく、ただの茶色の落ち葉もそこに描きこんでいる。虫の声を雑音ではなく鑑賞に値する音色と聴き取り、始末に悪いゴミでしかない落ち葉を「吹き寄せ文」として愛でる、大事にしたい感覚だ。

「吹き寄せ文」は日本の絵画や、文様の真髄を表しているように思う。空間処理として余白をいかすだけでは

なく、ゴミとして捨てられてしまう落ち葉と、無垢なまっさらな染み一つない地の対比、はかないものを愛する日本人の思想すら感じ取れる。

さて「吹き寄せ」という日本料理がある。これはシメジ、マイタケ、ゴボウ、ギンナンなど、色々な秋の食材を取り合わせた炊き込みご飯だ。彩りにニンジンを入れると見た目もきれいで更に楽しめる。

これを深鉢にご飯のように盛るなど論外、浅めの鉢や皿を使うにしても、たいがい普通に盛ってしまうのだ。果たしてそれでは「吹き寄せ」では無かろうという事になってしまう。集められたものに焦点が当り、集められかた、空間処理がどこかに行ってしまう。「吹き寄せ」と言うなら、私はどうしても余白を大事にしたいのだ。

大き目の無地の皿、できれば叩きで焼きしめの四方皿に、片側から流れるように盛りたいものだ。空いた所にさりげなく香の物でも添えるとなおい。

また又そんな皿を作りたくなってしまう。

2011年9月

泥んこ遊び火あそび そのIII

<http://p.booklog.jp/book/36794>

2011年10月18日

著者：大門良一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uzuwa/profile>

挿絵・表紙デザイン：セラ・カモン

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36794>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36794>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.